

ずいそう

「仏（ホトケ）」か「蛇（ジャ）」か

水野 将



大学を出て会社に勤めて40年近くになる。その中で30年を都市土木の地下鉄・地下街の現場で過ごしてきた。新入社員の時から自分が所長になるまで、何人かの所長さんにつかえたが、今回、「ずいそう」ということで、印象深い2人の所長さんについて回想し、思い出も含めて書いてみた。

私は73年に入社した。60年代の所得倍増計画、70年代の日本列島改造ブームと、建設業界も拡大成長している時代で、団塊の世代の大量採用とも重なっている。当時、建設会社も大卒の新人採用が多くなっていったが、現場の所長さんクラスは高卒の方が多かった。この思い出深い2人の所長さんも高卒であり、個性的であり優秀であったと思う。

当時どこの会社にもよくある話だと思うが、「鬼の〇〇（所長名）」とか、「地獄の□□（現場名）」とかいう話が社内でよく聞かれたものである。私のつかえた2人の所長さんもお多分にもれず、その愛称をいただいていた。

1人目の所長さんは「仏（ホトケ）の〇〇」と呼ばれていた。当時の現場所長としては大きな現場の所長であり、40代半ばで社内でも優秀な所長という評判だった。仏（ホトケ）と呼ばれているのは、性格的に冷静であり、「怒る」ということがなかったからである。私も2現場7年近くご一緒したが、声を荒げて「怒る」ところは見たことがなかった。その意味で部下の評判は良かった。しいて不満を言えば「ケチ」なところである。材料の注文書を出せば、「どこそこに〇〇枚中古材があるから先にそれを使え」と却下される。工事打ち合わせで「明日の作業についてクレーンを何台使う」と言えば「この順序で使えばクレーンの台数は減るんじゃないの」と減らされる。皆で酒を飲むときは事務所の会議室でやり、外では飲ませてもらった記憶がない。仕事面もあるが、息抜きの面でも「ケチ」であった。

「仏の〇〇」所長は、事務所、現場にいることが多く、あまり外出しない。その分、材料の在庫状況、現場状況についてはよく把握されており、日々の打ち合わせでもクレーンなどの機械、作業員、職員、どう使えば効果的な現場運営ができるか、今から思えばキッチリ管理されていた。ケチで少し堅苦しいが、冷静で言うことに間違いがないので、皆の信頼があった。現場が

終わってからも毎年のように所長を含め有志が集まって「〇〇会」を開いて懇親を深めていたのも「仏の〇〇」と呼ばれる所以である。

2人目の所長さんは、好対照の方で「蛇（ジャ）の〇〇」との評判であった。配属を告げられた時、正直言って「嫌だなあ」と思ったことを覚えている。

この所長さんは、現場事務所にずっと詰めているタイプではなかった。あちこちに立ち寄り、昼頃に事務所に顔を出すような具合である。どこへ行っているか、当時我々には知るよしもないが、関係各所に顔を出す営業マンのようだった。ゴルフも好きで平日にもよくゴルフに行っていた。要は、何処で何をしているかわからない、部下にとってはワガママ勝手な所長であった。反面、外での評判は悪くなかったと聞くが真偽は不明である。

「蛇（ジャ）の〇〇」は部下に厳しかった。現場で不具合があると、長い時間にわたって担当者を説教して苦しめた。昼頃、事務所に来ると現場巡視に出かける。現場から上がってくると、担当者を所長の机の前に呼び、説教をする。これが延々1時間以上にもなり、時には給料泥棒よばわりされ、真綿で首を締め付けるように責められる。作業打ち合わせなども所長が出る時には、出席者全員に緊張感が走り、気に入らないことがあれば担当者がその場で処刑？された。

夕方、「蛇の〇〇」は早く帰るが、安心できない。そのあたりで1杯やっており、夜勤が始まるころになると、電柱の陰で身をひそめて現場を見ている。時折出てくることがあり、酔っ払った口調でこっぴどくやられるハメになった。

「蛇の〇〇」の口癖、「俺のやること、10の内、ほとんど悪いだろうが、1つでも良いところがあったと思えば真似してくれればいい」であった。そういえば1つ意外な話がある。ある時、若い部下の子供さんが大病で手術をすることになり、輸血が必要になった。そのとき、怖い所長権限であちこちに声をかけ、輸血要員を集めてくれたという。後日であるが、その話を当事者から聞いて、少し驚きと感動したことを覚えている。

当然であるが、当時の「仏の〇〇」も「蛇の〇〇」も年齢は今の私より若いハズである。しかし何故か、今でも叱咤・激励されているように感じるのである。

—みずの まさる（株）大林組 常務執行役員 大阪本店 土木事業部長—